

通常展示「書物で見る 日本文学史」資料一覧 第V部

名称	解説	
V 近代の文学		
	<p>日本史では、明治以降が広く「近代」で、文学史も同様です。徳川幕府に代わった明治新政府の下、欧米諸国に追いつくため急速な近代化が図られました。欧米の文物や思想が一举に流入し、文学もその影響を直接間接に受けざるを得ませんでした。ここでは、日本古典文学史の締め括りとして、江戸時代までの文学が次第に表舞台から退き、近代文学が本格的に始動する萌しを見せた、明治20年頃までを扱います。</p>	
明治時代初期の文学	<p>明治元年～20年（1868～87）頃の文学。明治維新とともに政治制度・社会制度が大きく転換し、日本の近代が始まります。明治時代前半はまた古い文化と新しい文化の交代期に当たり、文学においても、江戸時代以来の系譜を引く作品と、ヨーロッパ文学の影響を受けた作品が並存していました。近代文学の始まった時期であり、古典文学の時代の終わりとも言えます。</p>	
明治期戯作	<p>「戯作」は、江戸時代後期以降の談義本・滑稽本・洒落本・黄表紙・合巻、また読本・人情本などを指します。明治以後、江戸時代からの戯作の方法・様式で、題材を新時代に取った作品が現れました。急激な開化による混迷した世相を風刺する仮名垣魯文の『安愚楽鍋』・万亭応賀の『青楼半化通』や、魯文の『高橋阿伝夜叉譚』などがあります。</p>	
小説・評論	<p>ヨーロッパの小説の影響を受けつつ、自由民権運動をも背景に、政治を主テーマにした政治小説が明治10年代に出現しました。矢野龍溪『経国美談』・東海散士『佳人之奇遇』などに代表されます。ロシア文学に学んだ二葉亭四迷の『浮雲』は、明治20年に第一編が発表され、近代小説の最初を印した作品となりました。ヨーロッパの小説論に基づく理論として、坪内逍遙の『小説神髓』、二葉亭四迷の『小説総論』があります。</p>	
芸能（歌舞伎・落語）	<p>明治政府は、演劇改良を唱え、歌舞伎に文明国にふさわしい内容と性質を求めました。江戸時代の末から主要な作者であった河竹黙阿弥は、これに応え、新しい社会風俗を取り入れた世話物の散切物、史実に即した時代物の活歴物を創作しましたが、一般には不評でした。この時期の作品に、散切物の『島衝月白浪』、世話物の『天衣紛上野初花』などがあります。落語の名匠三遊亭円朝も明治初期に活躍し、『真景累ヶ淵』などを創作しました。その語り口は、言文一致体の文章の誕生にも影響しています。</p>	
和歌・俳諧	<p>和歌は、明治20年代までは桂園派を中心とする旧派の支配下にありました。宮中の御歌掛の歌人高崎正風がその領袖です。俳諧は目立った作者はいませんが、江戸時代から引き続き一般の間に盛んで、撰集も多数刊行されています。中には新時代の事物・風俗を題材にして新味を出した作も見られますが、概して発想や表現が画一的で、後に正岡子規により、天保以後の俳諧は一括して「月並調」と批判されることとなります。</p>	
漢詩文	<p>漢詩文は、欧化の風の吹いた明治時代になっても男子の教養の一環として重視され、相変わらず盛んでした。おびただしい数の撰集・個人の詩文集・作詩の参考書が刊行されています。明治初期には、特に森春濤・大沼枕山・小野湖山らの詩名がありました。春濤は清詩、枕山は宋詩、湖山は唐詩を宗とした点が対照的です。</p>	
詩	<p>明治15年、外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎による『新体詩抄』が刊行されました。ヨーロッパの詩の翻訳と、それに倣った創作詩から成る詩集です。それまで「詩」は専ら漢詩を意味していましたが、漢詩に対し、日本語による長詩を「新体詩」と称したものです。七五調文語体という制約はありましたが、日本の近代詩の出発点を成したもので、直後に刊行された竹内節編『新体詩歌』を初め、追随作が続きました。</p>	